



重修真書太閤記

十編

四





特 13  
門取  
459  
卷 94

消  
福  
永

重修真書太閤記十編卷之十

加藤清正三ヶ濱と乘取事

并小早川隆景後誥洞古合戦の事

内大臣秀吉公の時宜しとあり直土佐國へ亂入あり  
と由りて泉州堺甘露山旭蓮社と以て御本陣  
とありされし後より妙國寺へ御移りあり惣軍七  
万余人とりゆきても四國へ下されし忍追々々  
さうへり注進しける様元親上方の注進を聞たり  
たひ堺目の要害堅固し申付人数を増一戦も攻  
崩しその跡に付て攻上るべしと勢よく待りけり

同  
會  
攻  
印

大目色十編卷十



つゝ嫡子盛親父元親とつゝめて申けるへ秀吉ハ  
その早とて猿猴の梢と傳ふりもとてやうなり  
とせよ噂とるあまへ南海へ押廻ととも有へと  
濱の手と姫倉備中守と備えとをけり又加藤清正  
ハ藝州御手洗より伊豫國和氣郡三津濱へ打りこ  
らんと用意とりけり然る風あけ今日よあ  
そよと日と送りけるより清正急度思案加藤  
清兵衛木村又藏飯田覺兵衛森本儀大夫齋藤立本  
井上大九郎庄林隼人赤星太郎兵衛等と以て忍び  
ゆり海人とも三四百人とて渡海と計り  
そのと隆景と日和と敵も用意とて風あ

敵の油断とて渡りてのつゝとつゝの  
隆景某この海上のこ能知なり今日あの頃の風  
よ此海より渡りけり今あや見合あへ  
いられよあり清正その夜ひとる兼て語ひ置  
し海人とも獵船六七十艘の艦とおさを大浪小  
浪と横切おしけるやと野間風早の濱輪と過  
三津の濱近く漕つゝ三津濱より徳居刑部  
と大将とて三千餘人よ海上より兵船数百艘  
りけ並へそれより六七下と隔てたる道後より五  
十路井内匠同兵庫兄弟三千五百余人横山より久  
武内藏助と大将とて栗山將監以下一万余人と



大隅言一終卷一  
籠杭柱の城柴尾の城西伊豫大津三机利嶋との外  
砦々として八ヶ所は五百三百の勢とるめ用意堅  
固に見えたりけり然とも風あしけきハ上方武士  
よめ渡らりと徳居とて油断して夜あくる  
よその酒のりよ前後も知どありたりけり清正り  
手のののりよ千餘人三津濱へ漕よを見よハ  
陣々の算とて能寐たり清正手水うりひ  
て男山とあり拜とやうて関の聲と上たり抑徳居  
刑部とつよハ河野の一族よて得能土居の両家と  
合と得居と名乗りの武邊せよとて謀りこ  
こ男のりよこも大風難波と頼りのこり心ゆ

をよりの終よ清正りよ追攻付らよ  
隊伍よよて備も立ハ刑部り甥よ徳居九郎右衛  
門とて六尺有余の大男あり打物取て四國第一と  
よびよ一勇士三尺余りの大身の鎧と打ありて  
向ハ當りよ幸突ありたりけり清正り  
よ見付りよ敵の有様のて此世の暇あけて得さ  
をんと云り早く例の片鎌の鎧と以て扣と立る  
よと見よハ忽九郎右衛門七八間と刻とんこれ  
起上らんとする処と只一突よつと伏やうて首と  
取たりけり九郎右衛門討と一のちハ徳居り勢ハ  
よつよこれ立直とて様もなまよ刑部ハ陣



屋ととて馬に鞭うち道後とさし落たりけを  
清正人数と引上見ゆる味方の侍五十一人討死し  
手負へ百廿人とぞ記したり討取首へ三百七十三  
そのうち名ある侍五十余人なり又御手洗の濱  
よて小早川隆景へ清正の陣の篝の自然とうとう  
なるを見てりや此大風渡海をさし見  
てあゝと使番と走らるる五月四日の晨朝と  
明行す見渡を南海らるる隔つこと黒烟  
天と焦して夥しとくや伊豫國道後りく三津  
の濱あり只今の焼亡の只事あり必定清正渡  
海して焼打ると覺ゆるととくや船と出せよと

ひしめく處へ立歸る使番へ口と揃へ加藤の陣處  
へ幕らうり人一人もいそびと注進とれ隆景  
さも有べあの豫州の海邊の焼亡の清正の業を  
らめ出し抜と一口惜さつと聲と帆と上ては  
た〜ひよよ七千余艘風ともいそび押切て真一  
文字三津の濱へ漕付これ果して清正三津  
濱邊に楯突からへ只今徳居を追落し兵糧はあ  
て士卒を休め氣色よけよち居たる隆景見  
るより秀吉公の軍振を能も見習ひ仕覺えりの  
ろか隆景御邊は年増せとわはらさ思ひも  
よら天晴日本第一の大將軍九郎判官も劣ら



一之のをと譽たられの清正を宣ひそ跡より續  
 く小早川殿をたのこて先陣の掛かとも猶此後  
 の軍をの何と持へそ御指南をよそ待ひそめと  
 云ハ隆景まもく感し腰より瓢箪取出し一盃の  
 きて清正まさしく然此後の軍を如何より仕玉ふ  
 そと問ハ清正さんハ憚多き申条され共申て見  
 へし徳居刑部の道後へ落しと覺えし道後より五  
 十路井内匠同兵庫う籠ると聞又松山の城を籠り  
 一久武ハ長曾我部う脇股と頼むののとうや然ハ  
 子の松山と道後の間と取切て道後と一時責落  
 し徳居五十路井三人のうちと生捕て四國の案内

者よ召仕ひひへと存をるのつと申けしハ  
 隆景尤も然と同心し然ハ打立人々と催  
 るし立とい大手し先む加藤清正う侍飯田覺兵衛  
 森本議大夫三百余人次ハ木村又藏井上大九郎三  
 百余人その次ハ齋藤立本班鳩平次三百余人その  
 次ハ清正の旗本一千余人その跡ハ赤星太郎兵衛  
 庄林隼人五百余人の道後へ駐し又加藤  
 清兵衛と大将として五百余人小早川の侍真田孫  
 兵衛松岡安右衛門五千余人と率ひて松山と道後  
 の間陣と取さそ搦手へハ小早川の先鋒ハ井下  
 龍馬允五百余人その次ハ朝枝信濃守三百余人桂



五郎兵衛尉三吉九郎兵衛尉三百余人その次小隆  
 景の旗本一万余人後陣綿貫權内五百余人あり  
 まく大津の加勢も有い喰止ふこと市川五郎  
 右衛門尉野上守右衛門尉宮莊太郎左衛門尉五千  
 餘人と引きて備と立あくと天正十三年五月六  
 日夕刻より道後の城と攻立る城より五十路井内  
 匠同兵庫徳居刑部三人必死となりて防と戦ふ攻  
 る飯田覺兵衛森本儀大夫あり兩陣更ふこと間  
 あ一城方より姫倉九郎兵衛と名乗生年廿三歳大  
 身の鎧と以て飯田に馳向ふ飯田は十文字の鎧と  
 て渡り合ひるう如何たりけん肩先と突きて

引退けの二陣の井上木村入りて突立る五十  
 路井徳居のを見て姫倉と引返と軍と馴働さ  
 やと敵も味方も感しひりりて其夜又刻と兵糧  
 つうくと寅卯の刻より打立飯田覺兵衛真先と進  
 と昨日高名をととて姫倉への臆と見ゆる  
 のの哉と呼られ五十路井内匠聞もあえび九郎  
 兵衛よあの口さく男と生捕とこれと下知とこれ  
 姫倉九郎兵衛承らぬと恋と馬と打乗馳出る  
 と五十路井兵庫あり止め敵の舉働昨日よりこれ  
 う暫時見合とあくと諫むると内匠更と聞入と  
 只今清正と打取と見とて其処退やつと逸



り立を徳居刑部とて出敗軍の將へ用ひへう  
いと申本文の上へ何事も申へさ様やくいへと  
も今日の加藤軍あり昨日よりうて見えけい  
兵庫殿の仰尤よ存ゆといへ内匠うくと打笑  
ひ御邊の目より清正と鬼とう神とう見えあり  
め我等へ尤のそ恐しくも存をひひ只今生捕て手  
元よ召仕ひ見とへさなりと言うなりう馳出とへ  
城戸と開て三百余人飯田覺兵衛尉あまささとお  
めと叫んで走たるへ目さましくあを見えたりけ  
と

加藤清正再度道後合戦の事

并五十路井内匠生捕り事

飯田覺兵衛尉昨日の敗軍と雪めんと城に向て  
姫倉と呼姫倉へ血氣の若武者よりちともあへえび  
馳出ると五十路井内匠引續て打て出昨日へ飯田  
う運はくく討漏しつと共今日へ遁さしそと  
動くあと聲うけ真しうと突うとへ覺兵衛尉  
心得たりと渡り合追つ追つ切つさうと火花  
と散しく戦ふさう姫倉飯田を弓手みす右手と  
のむして覺兵衛尉鎧の袖と引秘し引寄んとか  
しひるを飯田の早業せよと心利たるのをか  
とへちと押戻うと鞭とあられへ姫倉ハ力あまう



てうつむけし馬より落ると見向めゆるび六七段  
も引退と五十路井内面のうととすしと追々其  
間し姫倉馬のう直し足と亂し大手廣げささあ  
返とと呼り追たりける覺兵衛尉のう入す  
二人と引出しよと時分とと振りつる會圖のう  
旗とさしあけささうとと一聲よはるるやの  
彼方此方の林の重しより木村又藏二百余人の足  
輕し弓鉄炮と打とありし進し近つと関を作し  
又一方より森本儀大夫井上大九郎齋藤立本庄林  
隼人鶴平次つととも五十騎三十騎四方八方より  
切立突立ちとの透間もありしあし姫倉九郎兵衛

五十路井内面あけけりしとと諸ハ飯田のう計ら  
とけるよ口惜や然とと何とこのとありん打破  
りて通とと二人一所は馬ととらを踊り上り  
踊り上り突まをせ共加藤う兵士朝の涌う如く又  
大浪の寄るふ似て幾重ともあく取巻ゆれハ切共  
間かく突とも崩れを二人共心をやりハ猛けしと  
か疲れて氣もたゆと如何しせとと思ひ日び森  
のこりけし打寄てとと息とを繼たりけり清正  
の高さ処は打上り合戦の様と見ととと五十路井  
内面と生捕らととあひしうの手勢は下知しと  
一方とあけ敵の心と緩べりしとと姫倉五十路井



此手と切ぬけ城へ入るゝと又うけ向ふ敵の中面  
 もあつて戦ふゝとよつと圍と切ぬけたり内  
 面へ不思議とあつて見ると藁の積立の二つ三  
 つ立あつてひいと是究竟と走入て身と隠と姫倉の  
 切つとも知と敵と突破らんとうをささげと見む  
 るもせび森本儀大夫五十余騎とて五十路井と取  
 巻藁積立と火とりくれの内面も今いたまうり  
 踊り出ると左右より三四十人一度に折りこあう  
 終つてあつてあを高手小手と縛め馬と打のを引め  
 行つて姫倉九郎兵衛と呼とめつと九郎兵衛  
 たつとあつて五十路井内面へ降参したう因て大

将の見参入そのら本領と返し與ふと由定  
 めつとあつて其方も早く内面へあつて降参せよと  
 大音とあつて九郎兵衛仰天し何とあつて  
 内面へ降参めされしをたれ人の上なり姫倉  
 九郎兵衛のあつても四國とあつてあつとせよ  
 聞えつと名とあつてあつて命も所領もあつて  
 猿と仕とあつて小猿等と猿知恵とあつてあつて  
 ふつとあつて今と限りの死のくつと太刀の目貫  
 のつとあつて切て切て切盡し手柄のつと見む  
 つとあつて猛りつとあつて清正勢こそ叶つとあつて  
 つとあつて姫倉つと見む言葉と似ぬ雑入原罪作



うといあめくとも軍の習あり所なりとてとうと  
 とりよるとあそあは阿修羅王のあはたる如く駈  
 めりりく切りくは清正勢ありくうの五六丁あ  
 まりひひと崩と崩とつと九郎兵衛得たりと無  
 二無三と突立く責りりけるうあめひ寄ぬ陥穴  
 二落入たりこのも深くあはねとも又飛上り  
 くもあはこれ如何とせす一と見廻を処へ鍵繩  
 熊手と打ちけり終り引上りともも繩とけりた  
 へ無念くと齒りことちをともせんうの清正  
 勢へ勝関とあは本陣さく引て行道後の城より  
 五十路井兵庫内匝りち出しうりゆり時刻も

移りたるは開の聲次第は遠さる是の不思議  
 とあめりうち敗軍の士卒追々逃りり敵のさ  
 ことと落入るひ五十路井内匝姫倉九郎兵衛兩人  
 との生捕とあひと告りる兵庫ありてひ仰天  
 叔あを我あめり違は敵の計策に乗たるは  
 いうよせん打出て二人を取りくささやと八百余  
 人と勝り既と打出んとなりけるう又あめひく  
 一あまめと勝りりたる勢の中へあはさるうり  
 て打入たりとも二人と取りく得んはあめり  
 あり一先城中に引入本國へ使と立後詰と待てそ  
 のらう又計もあるへさなりと思案し神速は本



城へ入しうの徳居刑部待つてつらうのめくと問  
 まるゝ内匠九郎兵衛生捕となりし由とめりし  
 うの刑部大息つとこれとても敗軍の恥はあ  
 とつた此小勢加藤小早川の西勢は  
 うひ何とあるくはや何とるも本國へ注進し加勢  
 と待つて下知と請て後ともうも軍の持やうあ  
 るとさうと諫めると實充と同心し使者と本國  
 へ立たうける又清正勢ハ五十路井内匠倉九郎  
 兵衛と本陣を引連しうの清正と見て自身内  
 匠縛と解て座敷とあへ詞と正し是ハ内大臣  
 秀吉公の侍に加藤虎之助清正あり某内府の御使

として四國向ひしてあかち軍戎專ことをはな  
 ら只勅宣の趣を國人に告知せんう為り志々  
 はな國人等勅宣の旨成さく口けはるふより御邊  
 ハ四國みて人子知れ剛のみの形り早く清正ら  
 申む孫長曾我部との入申されはへ内大臣秀  
 吉はらハ四國の地を貪るふあらぬまハ先達て  
 石田三成りて申ては今ま改てのみまおよは  
 といひハ内匠威儀を正しをころも口はひと  
 先達て石田左吉を御使として仰下され趣主  
 ては元親ま入れぬまあらぬともをさう  
 たる返事なり御勢を向られはまうてハ弓矢取



身のあらひ形をいかにめくくと軍門よくぞあべく  
もろく加様は要害よこり陣をとり楯を突あら  
へる元親とても強て内府の御敵よあらんとも  
おのりあましくいへとも我等の主の下知ふより此  
道後の要害あひかりし身なりそれる早きさてや  
くの如く生捕となりし身なりとも又加藤どのく  
御使を法とむへさるどのりのみゆゆい所詮首  
をめぐればへいさきいれ某う主への奉公ハたち  
申し御使のこの余人よ仰付ら候へいと申さるて  
そ居たりけり

甫菴本太閤記よ四國退治ハ天正十三年四月廿

四日大和太閤言近江中約言六万余騎入て出陣  
を廿五日阿波よ着廿六日長曾我部新右衛門尉  
ろ和氣の城を落し長曾我部親安ろ一宮城を落  
し木津の城よこりりし栗原左衛門督を追落し  
仙石權兵衛秀久ハ讚列へ押しこり八嶋の城を  
落し七月中旬よ四國平均して歸陣とあり

重修真書太閤記十編卷之十終



重修真書太閤記十編卷之十一

加藤清正五十路井内匠と降と事

并三人衆人質と送る事

五十路井内匠一言の下ふ忠義と顯くあり清  
正も大感心し手と拍て是と賞し五十路井殿ハ  
あとの實の侍りか充程の人世も多く得りこりる  
へ但その誠心實意ありあはれとも田舎も生育  
あつた忠ふ似て不忠ふ陥り義も似て不義となる  
ことと知むるはあつたあつたさうかくと歎息しけり  
内匠居たけたうとありて申けるはあつた加

太閤記十編卷之十一



藤殿斯生捕と有りし身と以て兎角の問答無益と  
 似たりといへとも耳よりと問申さぬも只  
 今死する我身ありし心残りといへ也といふは内  
 匠忠に似て不忠義に似て不義といふとと詰りの  
 うると清正聞ひひも問はさる詞ありいごと  
 語り聞せん聞あへ御邊に長曾我部殿と君臣主  
 従の禮あることと知あへとも長曾我部殿の天子  
 とすこと同く君臣主従の禮あることと知あへとも  
 國の元ふと天日本八洲の一つと天照大神の知  
 とあふ処ありとこれ代々の天子のつとも天照大  
 神の御讓のまふ承繼あひ治めあふ処ありと故

ふ普天の下王土あつことと云處あり率土の賓王臣  
 にあつたといふ人す元親の領にあふ土佐とい  
 へとも王土として中國あへ守に正六位下あり  
 年々正税を貢し四度朝集の使に奉る期限あり  
 去るはを元親ゆらみ正税を運上せしむる四度の  
 使を怠れり其方其主の過を補ふ心あく其遺れ  
 るを拾ふ念なりそむく元親四國の兵を領して  
 我は勝るものかと思へとも日本の國猶六十四  
 あり六十四國の兵を以て僅に四國の兵を敗んと  
 假令に磐石を以て雞卵を壓う如し今内大臣秀吉  
 公天子の勅定より四國へ御勢を渡し玉ふ先



小石田三成を以て勅宣の旨を告られし元親定  
なる御請あさよりてなり今もあは元親過と  
悔罪と知て勅宣に從らる土佐國と永世不朽の領  
長曾我部の家長く相續とくさなり只今の姿よと  
へ長曾我部の家の危ふことやこと風前の燈よと  
も似たり國は争臣ありて君の過とつこむと  
の國を失ふびといふ本文今もさよあめひあこれ  
り御邊たぐ君の命に從ふこと知て君の過とつこ  
むることしらび因て忠に似て不忠なり義に似て  
不義ありといひ申なりと明に解諭しけし内面り  
心醉る如く首と低てののつと良ありて面とあ

け西眼は涙とらうめ何さよ某邊土遠境は生長天  
子あるとも將軍のまゝまびとも存とびたかか  
任とて國と切從へ勢みのりて人と押領とると道  
とあひひつるよ今加藤殿のつらと聞ハ實も  
あやまきり恨めしきりあ我君何とて早く天子に  
正税の年貢と獻しむとさるよやうあさりか我  
傍輩とも如何あさり我君とつさめて所當の公役  
と勤められさるよと四國の兵つらとものりて日  
本六十四州の兵よ及ふけんわ我等り主ハ長曾  
我部殿あれとも長曾我部殿ハ天子の臣あり主の  
過と知てふれと諫めば主家の敗る由と辨へか



何れと告ぐる何れよ不忠不義と申へし  
 つらも我等田舎人なりける道理と露らば  
 終る生捕の恥辱と入りしり云て後悔の色ま  
 余義の見えたりける清正の御申様御  
 邊實の後悔も長曾我部の家と興御身の  
 忠義と末代も傳ふる道あり我御邊のたふし是  
 と周旋とへしめれとも御邊の心中つらさなり  
 ことしらばとひしうの内面あり  
 入たる風情も何あは長曾我部の家と起し  
 うよとれ我等忠義末代も傳ふる御指南  
 頼入と申をよより清正左程と思ひあふる

御身の勇兵庫并徳居刑部と勧め當陣へ守  
 入あふ三人心と一つよを以て長曾我部  
 の家長く土州と保らぬ御邊のこめよと詳  
 く云へしとあり候とも御邊のこめよと詳  
 とへし内大臣殿より大軍とさ渡さる上ハ勢  
 二十万三十万も及ぶへし然らハ四國と平均  
 せん三四月のうちに然ハ元親あり内大臣  
 殿へ音信を通一家名安全と計りあふんとも十餘  
 日の内あるへし讚岐阿波の二國へ心そよ内大臣  
 殿の御下知より従ひしと爰許へ注進あり手詰ま  
 してへ申入らしとも事調ひ申ま去あふ兵



庫刑部の兩人の清正の心中を疑ひあることも有へ  
 しつらう以て偽あるぬも誓紙を以て申へ  
 と午王宝印の裏に氏神以下の神々うけし罰文  
 と加へ小指の血とそつて出しあう内面より  
 も嬉しげに清正と禮拜しさて申様我等の腹心の  
 郎等野田猪之助とつゝめいの同生捕て御陣  
 中よりありしと使として弟兵庫と呼申へと申  
 けるより清正のれとゆる即猪之助と召出  
 内面よりあつてける内面猪之助と呼居清正の眼  
 前より書翰と認めあつて猪之助とて其方早  
 く道後より兵庫に此状と渡し申へ兵庫此

状と讀終らひ必定其方と共に當処に來るへ其  
 方能々案内とてさなりと申渡して陣中と出し  
 りの猪之助とてやう道後に至り姓名と名のと  
 へ城中より元より知たるのなり早々城門を  
 開いて内へ入其方の内面と共に虜と聞つる  
 が如何とせしと問はると押さつめ兵庫に近習  
 と遠さげ内面書翰と出しけし兵庫のれと讀  
 終り徳居の由とて徳居の初より内大臣  
 秀吉と軍して勝つて道ありとあひしとあれ  
 早く内面と面會し事と計るへと申けるより  
 刑部は城を守らる猪之助と供として清正の陣に



至る清正のれを呼入對面し内面より引合を心のゆ  
く迫内談ありとて清正の側より引合より兄弟二  
人より向ひ清正より懇切とて語りけるは兵庫も兄  
と同心しけるはより再度清正より面會し急ぎ道後  
へ行くを歸り刑部と共に人質と参らるるはと約束  
し立歸らんとする処を清正呼りて見参のしる  
しはりてとて太刀一振とありえけり夫より兵庫の  
道後より入り刑部よりくと語りけるは刑部左も  
有へしと得心し得居五十路井兩家の親屬七八人  
所徒と共に六十餘人清正の許へ送りけるは清正  
大に悦ひ隆景も此由とて隆景のれを聞三津

濱といひ道後と云つるは名高き城地あるとて  
しと骨をも折と打落しるは手柄比類ありと感  
賞しとめり隆景家臣と進付清正の年も若しと  
の上民間より出て學問の暇もあるしとて戰  
うち攻めと取と孫呉も恥とて是の學問の益  
ありとのりといふれしとて期て後清正五十路  
井兄弟徳居刑部より計と授けて道後の城よりめ置  
小早川勢と同士軍とて道後より松山へ援兵と請  
を松山の援兵と松山押えの上方勢と軍最中道  
後の城より五十路井兄弟討て出たりん後へ清正  
勢と押廻し無二無三の城と攻つる時五十路井兄



弟ハ松山ごとく敗軍したらんよハ松山の久武内  
 藏助うあつど兄弟の者と城中へ引入るあつん其  
 時内藏助兄弟のののの對面とて時宜とて  
 て是と生捕清正の陣へ送つて期くと松山道後  
 三津濱と三城と落し得たつハ豫州ハまごごごひ  
 まつ平均つる存とるハ如何と申されうハ  
 隆景ももつと然るハ清正ハ武勇のとあつん  
 籌策もつとせよ勝とつる恐るハつくと再三感歎  
 然のちよつとや手配とあつとつと夫々ハ隊  
 伍と定めらるけり  
 加藤清正松山の城と責む事

并長曾我部信親後誥吉川元長敗軍の事  
 加藤清正の計策小早川隆景の意識全符合つる  
 手配忽と定りつるハ徳居刑部道後の城  
 と守と五十路井兄弟ハ加藤の手の者と引卒ハ小  
 早川勢ハ掛向ハ空軍とてつるハ松山  
 の城ハ籠る久武内藏助ハ五十路井兄弟より請た  
 る援兵士ハハかくと見るより面もあつハ小早川勢  
 小切ハハ折節姫倉九郎兵衛の使松山子來り息  
 も継あえハ申けるハ加藤の軍勢二三万もやハ  
 んさらん道後の城を取圍と攻るつとねと急子  
 以御加勢延引子及とつる落城且夕子迫りハといハ

大問記十編卷上

二



久武是を聞何せむ加藤と云りの秀吉の内みて隨  
一の者と爰許さても沙汰もなる兵船の負とを  
けの何様二三万の有了その勢を攻たらんよ  
へ道後の城の陥んと理あり然の人数とさし向へ  
しこと近澤左兵衛と先手とあり馬場太郎兵衛と  
城を残りておれと守らる久武内藏助一万余人ふ  
て打て出清正とあり是と見て加藤清兵衛尉ふ  
計と授け久武の手へ差向たり内藏助の勢へ新し  
ありあしうの少もなめらふと大浪の岩ふ當り  
て碎る如く切てうら清兵衛ありえう後さつと  
引へ松山勢と切勝たるとありと揉ゆと火花と

ちりりして戦ふと五十路井兄弟はう後とあり思  
儲りとしてあり松山勢と入り交り面もあつて働く  
ること誰うのあれと上方の加藤の手の軍兵と神  
なぬ身の知つた美事と道後の衆をかくし  
や五十路井殿の侍衆と褒つ勇めつ戦ふと加藤  
清兵衛取てうら久武の侍と森川源十郎とて  
身の丈六尺七寸大力無雙の大男ありける今日  
の軍に我身一つの大事ありとありひ定め小早川  
の手へ切てうらと小早川の侍と宮部五郎左衛  
門尉ありとと渡り合追つ掛りつ戦ふ処と道  
後の城とる落たりとありと黒烟天とありと

本朝記十編卷十一



夥しく立上る久武内藏助ありと見て口惜や道後  
のいゝや落ちてけりくつてい松山へも敵の寄るあり  
ん如何よとへこと進退谷り一処と見とまゝ一小早  
川勢一度よとつと切返せり五十路井兄弟りか  
と久武り手と心さして崩立と久武下知しく真  
中引包と松山さして引退く加藤小早川の打寄  
て勝関三度上て陣處と定め諸軍の勞と休めけり  
叔久武の城中へ返り味方と改むる討死二百八  
十人手負へ八百余人雜兵九百余人及へり然る  
に内藏助五十路井兄弟り向ひ今日の軍難義り  
て某とく討死とくうりけるを御兩人のかよよ

命と全く此思生々世々つてとへり  
て先軍の次第と本國へ注進元親此と聞大  
ふ驚と借もく時あるりか天あるりか徳居刑部五  
十路井兄弟久武の四人の世も許されたるゆ  
の共あるるに尤様と拙く打負しと戦の罪はあは  
さうとて是と聞捨よとへり元親罷向ひ  
一當あてり見とへり我より從ふ侍ともを  
進と出で申様三津濱道後の落城りつ松山の久武  
り敗軍としと御怒りありて御出陣ゆえんとつ  
るも勿体なく所詮始終勅諚し御背さあんとつ

二月廿一日

乙



御心ごしんよりしるしることハ秀吉ひでよしも既すでニ知してゆへはこと  
 とい後日ごごニ御上洛ごじやうらくありて秀吉ひでよしニ面おもて合あはせむと  
 時ときあまりの仇あいつと深くあさねうさ然しかるるくくいい但たし  
 小早川こぞうがわの顔かほのよよくくいいへへ某御陣代まがごしんしろしろととて罷向まかりむか  
 ひ申ひまをへへいい其上阿波讚岐あべあまのさかあとの城々しろしろありて免めんをん  
 斯しをんと注進ちゆうしんのいひひしし時ときも御座ござままことハ事ことりりと  
 申まをへへいいと申まをひひるるよようう元親もとちかも尤なほありりと同心ごんしん  
 本山將監石部兵部の兩人もとやましやうかんいしべへいぶのふたりにんニ六千余人ろくせんにんと授まをけけ信親のぶちか  
 の勢せい四千余人よんせんにんと合あはせせて一万余人いちまんにん六月三日ろくがつさんじつ出陣しゅつしんわ  
 う信親のぶちか今年廿一歳ことしにじゅういちさい身の丈みよのぢやう六尺四寸ろくしやくしゆしゆかハ八十人はちじゅうにんふ  
 て上下うへしたとるとる船ふねと一人ひとりししくくああつつりりひひびびるるゆゆととひひりり

然しかるるよよ吉川元長よしかわのりちか小早川こぞうがわの援兵えんぺいのためため井下いげを馬うま先まと  
 と先陣せんしんとといい山形源右衛門やまがたげんえもんと二陣ふたしんとと元長のりちか三陣さんしん  
 備そなへへて向むかひひびびるるううももの金子傳兵衛かねつでんべゑ籠かごりり高たか  
 尾おの城しろと取巻とりまきて攻せたりりびびるる抑おさへへるるこの金子かねつとといいハ  
 昔相州衣笠の城むかしそういかさのしろよよくく高名たかなたりりびびるる十郎家忠じゅうらうけちゆうの  
 苗裔なえいなりりびびるる河野通信かののぶみの武藏國むさしのくにありりびびるる時とき  
 より親ちかししるることハ終すま河野かのの家人けにんとといいハハいいりり  
 近年元親阿波ことしちかあべの大西上野おほにしやのと攻せつめ降参かふまことハ  
 時とき金子かねつも大西おほにしやと親ちかししるることハ元親もとちかニ従したがひひ  
 今度上方ことしあふ勢せい豫州よしゅうへ渡り來わたり來きて三津道みつみち後松山ごまつやまの  
 城しろニ勢せいとといい向合戦むかうせんつつききことハ此城このしろハ三方高さんぱうたかと

大隅記十編卷十一



切岸より鳥あつて上りて道もなれ一方の道細  
くして多く並ひ行くと然しとも元長とて  
の猛將あつて種々手立して石垣と上り塀の下  
り手と掛乗越んとすけるも此塀釣塀あつて切  
て落され二三百人壓ふとこれく失ふけり吉川勢  
色めと立て見えける処へ金子の家の子熊谷四郎  
左衛門尉大身の鎗と打あつて突て出群り立た  
る寄手の中へ面もあつて突入たりあつて續つて  
植松藤兵衛飯田傳左衛門川村權七澤浪七兵衛岩  
倉九郎左衛門あつて名も聞えける侍とも真一文字  
と切りける吉川勢心へたけりといへとも崩と立

たる軍の習ひ盛りくとも義勢もなれ共崩と  
崩とて城中の勢ともいへると吉川勢へ引色あ  
つてやといふるとあつて總軍一同に切掛る中よ  
り飯田傳左衛門川村權七真先よ馬とあつて切  
入たると元長の旗本とて立とて危あつて見る  
処も松の原彌八郎生年十九歳十三貫目の鉄の棒  
と打あつて人馬の差別なく當ると幸打ひと叩  
き付て狂ひまると金子勢も辟易し今ハ是よ  
てなると引貝吹て勢と引上たり  
十三貫目ハ昔の七十二斤に當る松の原彌三郎  
ハ松原播磨守盛重の末子少輔五郎の弟ありと



云

吉川勢も金子り人数の引と幸とて軍勢と集め  
一里いり引退つて陣と取手負死人と改むる  
侍十九人諸士三百余人手負ハ七百余人なり元長  
大に驚さ我家と繼しありあのうと数度の軍ふい  
まの押付と見とてとあり此度いりり能めの多く  
討をたりと牙とりて憤り再度の軍と企てけり

重修真書太閤記十編卷之十一終

重修真書太閤記十編卷之十二

金子傳兵衛尉吉川勢と破る事

并熊谷四郎左衛門尉勇戦の事

伊豫國和氣郡高尾城に籠りたる金子傳兵衛尉  
とつら五百餘人の軍兵と以て中國よ名高と吉川  
駿河守元春の嫡子元長が一万五千餘人の勢と引  
受少も恐と唯一戦の下よ追崩つとて天晴名  
譽と賞翫さるるも理あれや吉川方よと高尾の  
要害よけしとも分内とて小城に傳兵衛勇あ  
りとも成るのつら五百餘人攻る味方ハ一万



五千たぐへ一人と三十人よとて伐へていり朝の  
 間ふ打落とへしと思ひしうの誰一人の怠りとい  
 無きともあえなく敗軍ふ及ひしと實に遺恨や  
 とす元長諸物頭と集め申ける此城狭いこと  
 要害より成る士卒少ふことと大将の氣健し勿  
 勿力攻むと攻むことと方便を以て是と破るべし我  
 よ一つの謀ありまづ先陣一里をかりも引下  
 陣を取夫より一勢く引後らうして濱手追備を  
 立へく然その外は元長旗本を以て城のやとら  
 り埋伏し大手の合戦頗る難義らしく見ゆるあり  
 偽て濱手の陣を忘る敗走せし城中より傳兵衛勝

不乗て追掛出へし傳兵衛打て出るを見計らひ我  
 旗本もて無二無三の城を攻取へし是伐表裏の軍  
 立と云金子勇あり智深共加様もひきたらん  
 みは必定切て出へるなりと思ふ如何ふとあり  
 けしに諸物頭一同も實に可然しひあん我々更  
 思寄の事形もいと申志る然に打立人々とて城  
 より次第に引下く陣を取城中より此体を見て何事  
 からんと疑ふを傳兵衛槽より上りくと見分し何  
 も寄手の謀ありと覺えし我々の敵の計に就て  
 謀と練て面々籠城の鬱氣と散し申へしこのひ  
 ひつら槽と下りそのうち姿とくして城と出寄手



の陣々見廻り然立歸り心は定め秘密を以て役  
所役所は定立寄手おそし待ととの神あはぬ  
身の吉川元長知つて様あて無りけし然吉川勢  
の中より宮庄覺左衛門神保豆野上兵衛尉朝枝四  
五六左衛門尉ふと眞先進鉄炮と打りけ大手  
搦手一同攻寄たり城方よも大木大石と投げ  
け挟間と開て鉄炮打出し弓と射掛をさ間なく防  
さけし敵も攻わくし休むとらと攻口と引退  
さ城下ふ竹束と突あくし楯と搔つる経逆茂木引  
て陣と取只遠巻と巻たりける城中より是と見る  
よ夜ハ篝と焼夜廻りの折木くくまよと追ひりけ

る城中より是と見ぬ酒宴歌うこひ  
舞う入て踊り狂うささ更ふ籠城と苦しとあひ  
様みハ見えさうけり寄手の城中乃体を不審しり  
断の休とあて寄手大さ怪々如斯ての城中欺り  
と如何よとやと吉川勢本陣さし引取処と  
城中より見たし見定め熊谷四郎左衛門尉と大  
将と植松藤兵衛飯田伊右衛門以下二百余人と  
懸坂より龍浪村と打越其夜亥刻過り忍ひ出衣  
てうらと直ふ火とけ焼立しういさし猛吉







のめの走り歸り四郎左衛門殿との始の勝りのり  
て元長の本陣より押つめをてよ元長と討取つて  
ひひしし吉川馬廻り近習の面々能働てひよよ  
り味方とてある切崩され熊谷とのも手と下して  
戦ひぬ漸切ぬげあど追引取とてひとのつへの傳  
兵衛牙喫とてわどわど火うけ手軽く引上りて  
ひひつるのめのとと躍りうりて口惜うとと甲斐  
とふと然とも金子熊谷一所より打寄息とも繼をひ  
攻立し吉川勢より突破らぬ立足もあく敗走り  
金子熊谷城中より返り味方の手負討死と改むるよ  
討し一ののの吉良一人手負のつうよ八十餘人

吉川方よの百三十餘人をうこれけり元長よのも  
苦しげと大息繼眼の朱とそとたる如くよあり  
て此上へつと傳兵衛と存亡と極むへと怒りけ  
る小早川の陣より大筒七八挺より寄高尾の山  
の尾上より強薬よと一度よとつと打放しうん何  
うの以てたまるへと大手の石垣八九間微塵よ打  
碎きたり大手の大将板原彌八郎を乗入よと總  
軍と下知しけし我もくと込入たり彌八郎真先  
よ進よ死して名よの残をととも生て面と汚とふと  
立上りたら上り下知しけし誰一人も後  
つと面も振と責入てあひのひよめとさけり彌八



即ハ例の鉄の棒と以て人馬とつゞき打ひしと叩  
 らたてけるより此手のこて敗れたり金子傳兵  
 衛ハ搦手小在ける大手の軍急なりと聞らしを  
 來て見るとハ敵雲霞の如く亂入してしるも眼みあ  
 らる大軍なりとされとも傳兵衛とこしも屈をばあ  
 の鉄の棒の働く男ハ叔原彌八郎そあせと打取  
 やめの共打て落せしや足輕ともと血眼よりりて  
 下知しつとも彌八郎り勢よおそれてや打鉄炮  
 の玉越とささよその身みあせし彌八郎よま  
 まとたけり立て走り廻り傳兵衛を見て我れある  
 ハ金子傳兵衛よふ是ハ杉原播磨守り四男彌八郎

ありつて見参とさしと近付りの棒と以て打り  
 る傳兵衛ハ四尺余りの太刀と接りし拂切し切  
 らしひける處ハ吉川方よりし大筒と打放しけ  
 るより大手の隅矢倉一川より打破り其崩しよ  
 り大将元長一番よ乗入けるとみて飯田傳右衛門  
 尉植松藤兵衛諸勢とつさめ弓鉄炮ととら間ひの  
 打放し射出しありの哥手もさけり進み得と元長  
 かくと見ゆよ大身の鎗を打りし引めのを  
 ハ我突殺して呉んまをのをと大音のくしとく  
 競ひ掛るより池田新兵衛と名乗て城兵三人突  
 伏たり是を軍の初となし神保山形我劣めしと續



たまたま飯田も植松も終に切負金子と助け松山  
さして引退く又熊谷四郎左衛門へ吉川勢も取込  
らと兎の打落され大童よなうして戦ひける味方  
大形討とて初の百餘騎あつてける今もつう  
三十餘騎あつたさるさるとも熊谷一人の手も  
負ひ甲首七川雑兵とい三十餘人切て棄進んで  
戦ふと金子らうり見付あつた熊谷四郎左衛門  
見捨て何處へ引へどと馬の首と引うへ飯  
田植松うへひつりひつり早く吉川勢も馳  
向ひ手の下よ七八騎切ておとさう熊谷大よ  
かと得難あつ切勝金子と一所よ打寄たり吉川勢

あまはましと討てうるとい飯田植松うへ取突  
てい落し切てい拂ひつりけるよあり敵もさす  
い追掛と金子熊谷よ向ひ危ふも御身と見捨て  
引んとせし口惜さされとも軍神の冥慮よあり終  
よ再會と得し嬉しともと互に語り合松山へあそ  
入たりい吉川勢へ高尾の城と乗破り勝関上て  
一宿し先度の恥辱と雪めしと悦ひのさむと道理  
なり又高尾の並ひ石川と云処よ石川刑部といふ  
のの元親の姪婿よと然も大身なれは枝城二川抱  
て籠居たりけるか高尾落しと聞居城並み枝城の  
帆柱柴尾よて明退たるぞ是非もさす元長夫より



柴尾より移り諸士の勞とて休め加藤小早川の両將  
と見繼ぐへため後詰の用意とありてけり

加藤清正松山の城と乗取車

并金子傳兵衛久武内藏助と援ふ車

然も加藤清正の道後の五十路井兄弟より謀と授け  
松山の城へ入置大手より加藤清正搦手より小早  
川隆景大軍と以て十重廿重より取りこき仕寄と付  
て攻寄たり抑あめ松山の城の伊豫國第一の要害  
なれ元親ありて心と用ひ廣さ四町四方に築き  
堀の幅口十丈より餘りて堀せたるに容易く攻破る  
へくの見えさるける其上久武の勇士なり勢も五

万人及び兵糧の澤山なり五年六年籠城を共  
勿々落へしとの思もよらひ五百藏兄弟種々心  
を碎くといへとも用心よけしに内通をへき隙も  
かく役所くの多けしに漫々使も出されを其上に  
土列より彌三郎信親一万餘騎にて後詰の為既  
打立つし朝夕の間より到着するあゝんと久武大  
に悦び大手より我身むらひ搦手より五十路井兄  
弟と大将とて成らる後詰の勢到りあへ一時  
打出切崩さんと心構へて待居たり寄手の方より  
ても斥候と出して聞ゆる土佐より援兵一万餘  
騎よと押寄る由と注進をうへ小早川隆景の先



鋒石橋八郎左衛門尉二千餘人清正の手より森  
木儀大夫より三千餘人と付て後詰の押えより向  
め責口ととて退とておえり五十路井兄弟是  
と見て時今と小早川陣へ箭文と射たりお  
寄これ今宵城中より火と掛てその糸と小早川を  
開と申へ手番油断あるへうと書たりけ  
り小早川是と見て加藤陣へ煤合を合圖の時  
刻と待居たり然る其日の風強く吹て大木と吹  
折沙と飛し土烟天と掩てめの騒々夜はま  
まと烈しうりける五十路井と時節ありと搦  
手の小屋より火とこたりけりハ忽燃上り炎焰々

と吹あひさし間よ廿餘間うけ並へたる役  
所も小屋も只一面に焼とるの烟四方に吹散て面  
とむげん様と名と城内に驚とあそと上と下  
へと混亂と久武内藏助大手より走り来り消防の  
手當とすありとも風にあたり火勢の強しとの  
間よ増々焼川のさる如何とんと狼狽しつる  
見て五十路井城門とさつと開さけるよと小早川  
勢無二無三よ入たりと見ると久武内  
藏助よ五十路井兄弟より舉動や飼犬よ手とハ  
此事あつめ微塵よあつて呉んとめのと討て掛  
つと五十路井兄弟あつらひあつて城門より外へ



引退く久武内藏助大いせと立逃し  
折しも清正う打を佛郎機に當り角矢倉  
の石垣八九間蓋粉に碎うと去る久武つとあ  
くく急よ人数と立直し備と配らんとを  
る處へ飯田覺兵衛森本木村井上とつと夜又う  
金剛うと見るさうりの大の男られ先よと乗こめ  
久武今へ是まくと二度へ死あしと獅子の子の  
荒うう如く切廻り突やうほう四方八方ふ馳ゆく  
戦へとも火の手城中ふとちく如法深夜のこて  
あり敵味方の合色もとううべ一先とと打破  
つ後誥の勢と一つより五十路井兄弟と打て取

その後松山と取うへとと思ひ定め一丈三尺  
の片鎌鎗と打あうと走り出ると五十路井兄弟よ  
く見知品川あとの鎧に挑形の兜月毛の馬と朽  
葉の厚總金の切割紙のさしあいの城の本人久武  
内藏助よと呼らり追懸たり寄手の中より清正  
勢是非よ久武と討取んと前後左右より取巻と内  
藏助よののし手柄のゆとと能見よとと一聲  
叫ひと突たどい死生に知と八九人算とととて  
倒して森本木村左右より天をの御大将と聲  
うけあうと切らり内藏助飛つ躍つ打合たり  
これとも久武運つとと爰ともさつと掛ぬひと味



方と見よへ九十六騎へ討とらうよ十七騎  
どつとたり内藏助鞍の上立上りむう平治  
の軍義朝破して落ちし其時も十七騎とらや  
それ熊谷平山金子等とゆ今こら打のここれ  
人々のうをもあゝ十七騎たさうむりの  
熊谷平山よ劣るこら彌三郎殿と一つはなり  
て今一軍ふとこらとゆとゆとゆと打連て山  
手へうら森のうけ先より待める石井兵藏つと  
駈出て路と塞と松山の大将久武内藏助と見ら  
僻目のうとゆと切らう久武も道とぬ処と  
心と定めと首參らとん請取とくと切廻ら石井

う勢ハ二百余騎三つに分て久武う十七騎と真中  
と打圍と入替ゆむると味方十三騎へ討  
と残る四人も馬と切とて歩立なり石井ハ得たり  
と大手とひらけつと組んと久武ハ  
組とと跡とこらと深田の中へ真逆とを落入  
たり石井らうらひ大勢とて手取足取上らと  
て繩とうけやう馬とゆとて本陣とと引  
返れたる本道と行ハ久武う手の者ととこ  
こら目ようけて路次のこらたけ有めやせん  
遠慮して山道越とこら路と急げへとた  
なり金子傳兵衛熊谷四郎左衛門高尾の城とゆ



ら松山さく落来り行合たり傳兵衛馬の  
 とを誰あらんと見よのあいつら松山の  
 城の主なる久武と高手小手よつめたる借の  
 松山もろ落城を去りても久武と取り  
 寄手の雑兵蹴殺して呉んとのと大身の鎗の  
 三尺さうりつと以て先進し雑兵と只一鎗  
 と突倒し猶も進みて狂ひよれぬ熊谷四郎左衛  
 門久武乗たる馬に付添し東原九郎兵衛と  
 たり合終り切ふを久武縛の縄と切るとたり石  
 井兵藏と見ると見ると熊谷と打てうける熊谷石  
 井とらつと見て小賢さ我と誰とのおのりや

四國よ名高ら熊谷のつと詞のおらぬ  
 石井綿留つと中よ釣あけ刀と抜て下切  
 ち切て捨しうの相従ふ侍ともさ舌と振ふ恐  
 とや散々よを逃失たそのち金子久武  
 と打つとて高尾の城を破らるとこの木末と語り  
 ひさ久武の五十路井兄弟の野心よめりて松山  
 を焼立られ如斯の始末よ及ひしを御邊よ助けら  
 れ命生延し嬉しげと我君の御眼鏡のり一城  
 の主とあされ兵糧玉薬ハ云よ及る人数も五万  
 ちりく持あう浅々城と落され何の面目と  
 以て我君の御目よりさやのて敵よ打合討



死<sup>し</sup>冥途<sup>めいどう</sup>黄泉<sup>やうせん</sup>より主君<sup>しゅくん</sup>へ御禮<sup>ごらい</sup>申<sup>まを</sup>へしとつひとて  
敵陣<sup>てきぢん</sup>へ入<sup>い</sup>んとすゆると金子<sup>かねこ</sup>傳兵衛<sup>でんべゑ</sup>お  
とめそれの誠<sup>まこと</sup>と短氣<sup>たんき</sup>なり城<sup>しろ</sup>と破<sup>やぶ</sup>らばし某<sup>その</sup>  
ことも同<sup>おな</sup>ことなりいりよもく其<sup>その</sup>高尾<sup>たかお</sup>と取<sup>と</sup>  
へし申<sup>まを</sup>へし御邊<sup>ごへん</sup>の松山<sup>まつやま</sup>と取<sup>と</sup>て五十路<sup>いそろ</sup>井<sup>い</sup>兄弟<sup>けいぎ</sup>と打<sup>う</sup>  
らへし申<sup>まを</sup>へしその上<sup>かみ</sup>彌<sup>や</sup>三<sup>さん</sup>即<sup>すなは</sup>殿<sup>どの</sup>御出陣<sup>ごしゅつぢん</sup>あれ  
の御迎<sup>ごむかひ</sup>よ參<sup>まゐ</sup>り二度<sup>にど</sup>の軍<sup>いぐさ</sup>と持<sup>も</sup>ちあへしと諫<sup>いさな</sup>めら  
實<sup>まこと</sup>のとめへの金子<sup>かねこ</sup>久武<sup>ひさむし</sup>うちつとて信親<sup>のぶちか</sup>の陣<sup>ぢん</sup>へ  
とつひとつひ

重修真書太閤記十編卷之十二終



